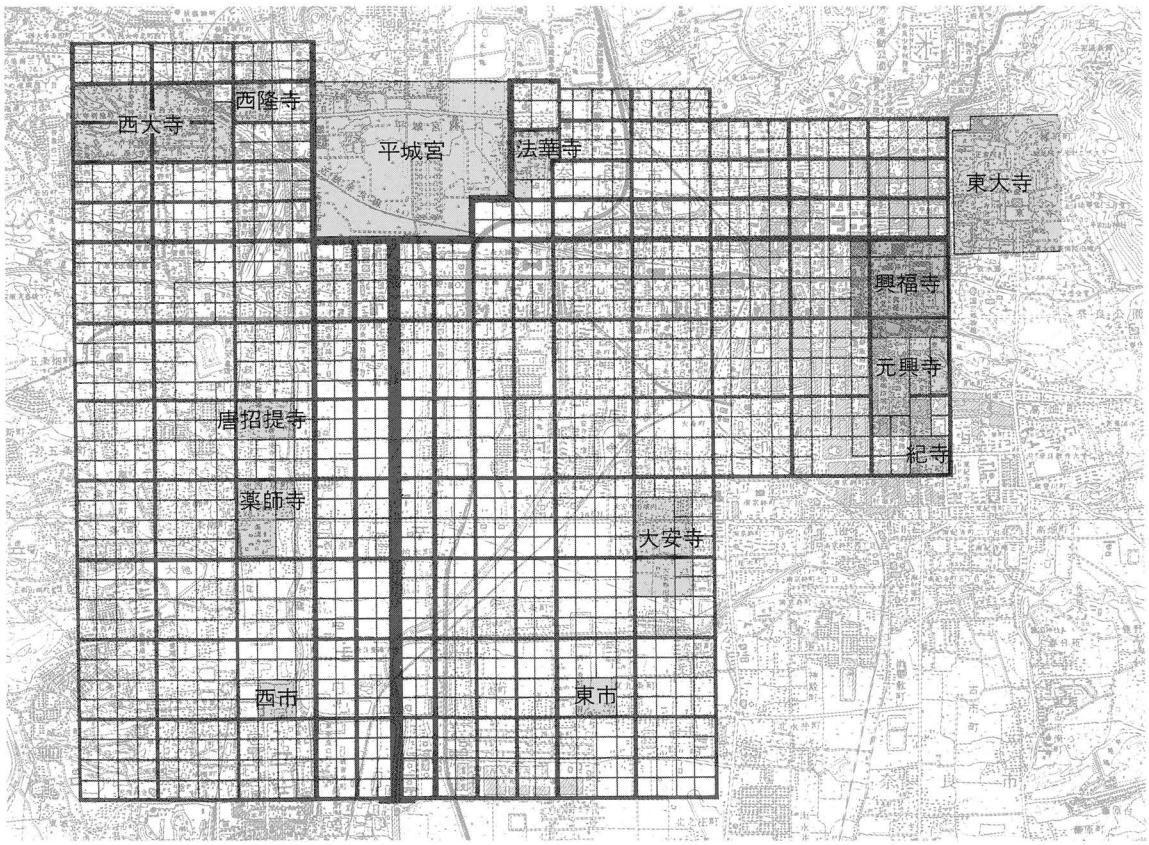
## 4　興福寺の伽藍と中門

**寺地と伽藍**　興福寺は、東に張り出した平城京外京の東辺、左京三条七坊、現在の奈良市登大路町に位置する。興福寺の寺地について『興福寺流記』中の「延暦記」は、「東限京極路。西限大路。南限元興寺北小道。北大路」とする。東の京極路は東七坊大路、西は六坊大路、北は二条大路（当初は１町南の小路まで）で、南は三条大路をこえ菩提川の流れにあたる。左京三条七坊と四条七坊の北４町を占めていた。猿沢池を含む南４町は花薗であり、西外側にも２町または４町分の菓薗があった。

平城京における興福寺の建立は記録にないが、和銅３年（710）の平城遷都後まもない和銅年間から養老年間の頃と考えられている。養老５年（721）に北円堂、神亀三年（726）に東金堂、天平２年（730）に五重塔、天平６年（734）に西金堂、天平18年（746）に講堂がつくられ、天平年間には中心伽藍の姿が整う。やや遅れて平安時代の弘仁４年（813）には南円堂が建立された。

伽藍中枢部は、中軸線上に南から南大門、中門、中金堂、講堂とならび、中門から発する回廊が金堂に取り付く。この中門と中金堂を結ぶ回廊に囲まれた区画を中金堂院と呼ぶ。金堂と講堂の間には、東に経蔵、西に鐘楼がおかれ、これを取り囲むように東室（11世紀より中室）、西室、北室（上階・下階）の三面僧房がある。講堂の東には食堂があり東室と軒廊で結ばれ、食堂の南には細殿がおかれた。

中金堂院の東には、西面する東金堂と、その南に五重塔がある。これらを囲んで回廊が西側と北側に、築地塀が東側と南側にめぐり、この区画は東金堂院と呼ばれている。東金堂・五重塔と対称の位置には、それぞれ西金堂と南円堂が位置する。




第５図　平城京と興福寺の位置（１:50000）

**中門の歴史**　中門の建立は、中金堂の建設とともに創建当初の頃と考えられる。『興福寺流記』は、その様子を「一　南中門一基。長五間。々別一丈五尺。宝字記長七丈八尺。広二丈八尺。宝字記延暦記同。上二記架端皆用金泥裁銅。（中略）延暦記云。（中略）四方各小門二門。宝字記云。小門八口云云。」と伝える。この記述から、中門建物は、桁行５間78尺、梁行２間28尺、南大門と同一規模と推定された（大岡實『南都七大寺の研究』中央公論美術出版　1966）。享保焼失前の寺蔵古図によれば、中門は単層（一重）で、屋根は切妻造り、正面５間の中央の３間を扉とし、その前面に３間分の階段をつける。回廊は、梁行２間等間で中央の柱筋に連子窓をもうけた複廊である。

平安時代以後、中金堂院に限ってみても、永承１年（1046）の類焼にはじまる７度の火災に遭遇し、６度の再建を重ねている。以下にその経過を辿っておこう。

①　**永承１年（1046）12月24日**

興福寺火災。金堂。講堂。西金堂。東金堂。南円堂。鐘楼。経蔵。南大門。東西上階僧坊焼亡。

但北円堂并正倉院。金堂釈迦。南円堂不空羂索。西金堂仏等取出了。　　『扶桑略記』同日条

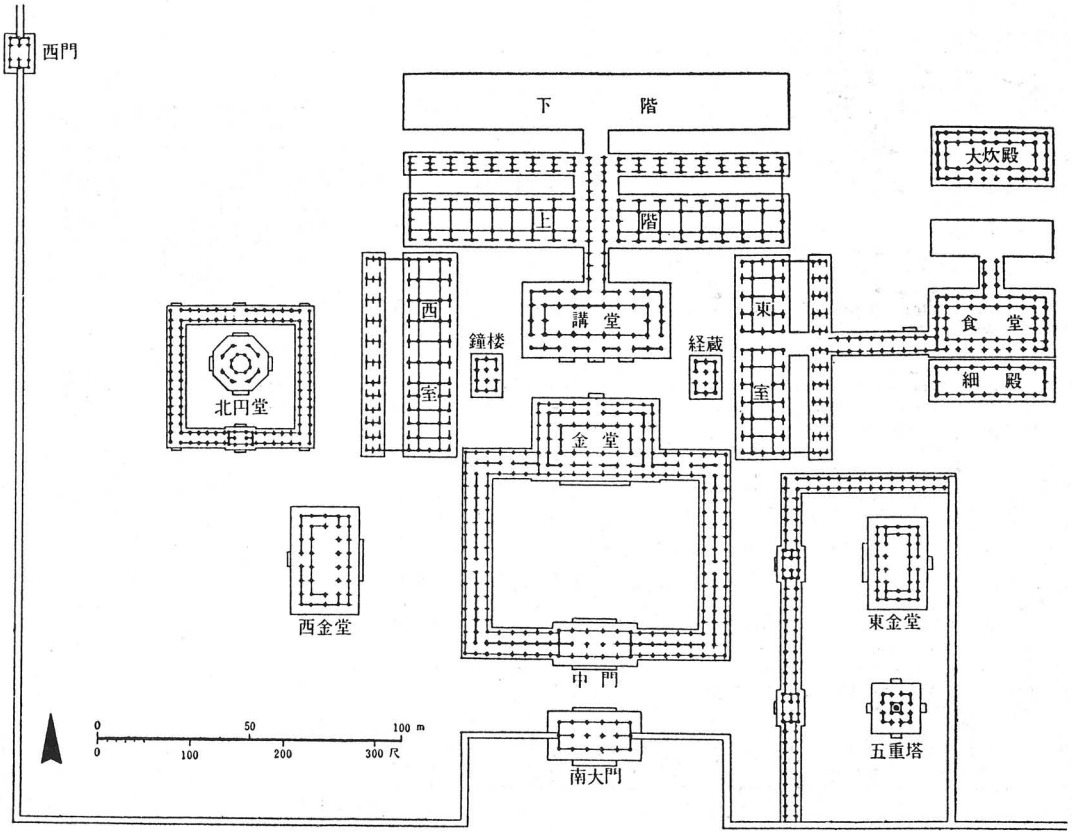
中金堂院を中心とする建物および南円堂の再興については、『造興福寺記』に詳細な記録がみえる。再建供養は、永承３年（1048）３月２日におこなわれた。

②　**康平３年（1060）５月４日**

去夕亥剋。寺家焼亡。金堂并回廊。**中門**。大門。維摩堂。三面僧房為灰燼。

『康平記』同年５月５日条

再建供養は、治暦３年（1067）２月25日におこなわれた（『扶桑略記』同日条）。




第６図　奈良時代の興福寺伽藍配置復原

③　嘉保３年（1096）９月25日

卯時許聞。此夜半興福寺有焼亡。火従東妻室僧房上出来。則付講堂。仍金堂南左右廻廊。中門。南大門。鐘楼。経蔵。講堂并三面僧房皆為煨燼由。　『中右記』同年９月26日条

永長１年（1096）12月15日に手斧始め、承徳２年（1098）２月11日に棟上をおこない、康和５年（1103）７月25日に供養されている（『中右記』）。

④　治承４年（1180）12月28日

注進。

興福寺中寺外。堂舎宝塔。神社宝蔵等焼失事。

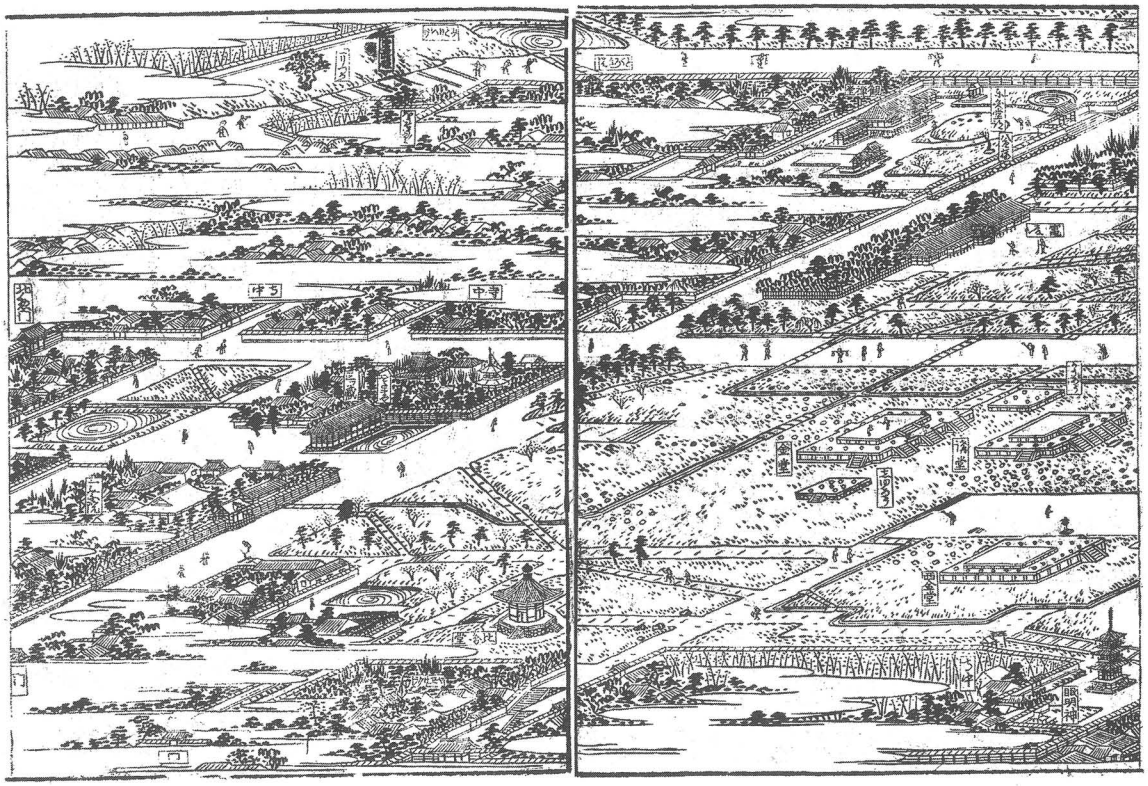
合

一　寺中。

金堂。講堂。南円堂。食堂。東金堂。西金堂。北円堂。東圓堂。觀自在院。西院。一乗院。大乗院。中院。松陽院。北院。東北院。発志院。観禪院。五大院。北戒壇。唐院。松院。伝法院。真（言）院。円成院。皇嘉門院御塔。総宮。一言主社。滝蔵社。住吉社。鐘楼一宇。経蔵一宇。宝蔵十宇。大湯屋一宇。（割注省略）

已上。堂舎三十四宇。宝塔三基。神社四所。宝蔵。大湯屋等也。此外。三面僧房。四面廻廊。大小□門。□□□□□房。諸院。不知其数。□炎□所□。尊教院内小房一宇。角院内小房二宇。窪院内小房二宇許也。　『玉葉』治承５年１月６日条

治承５年６月15日には造寺官が任命され、諸堂の造営が全国に割り当てられた。建久５年（1194）９月22日に金堂の供養がおこなわれたが、中門・回廊については完成の年次が明らかでない。『春日神社文書』中の大江泰兼申状からは、回廊の完成は金堂供養に遅れた可能性が指摘されている。



第７図　『大和名所図会』（巻二　添上郡）にみられる興福寺の様子

⑤　建治３年（1277）７月26日

興福寺炎上事。先清冷院ニ雷火在之。自其三面之僧房皆以焼失了。講堂。金堂。廻廊。**中門**。南大門。講師房此等皆焼畢。　『中臣祐賢記』同日条

弘安２年（1279）10月26日に金堂、講堂、中門などの上棟がおこなわれ（『興福寺略年代記』同日条）、正安２年（1300）12月５日に供養が行われた（『帝王編年記』同日条）。

⑥　嘉暦２年（1327）３月12日

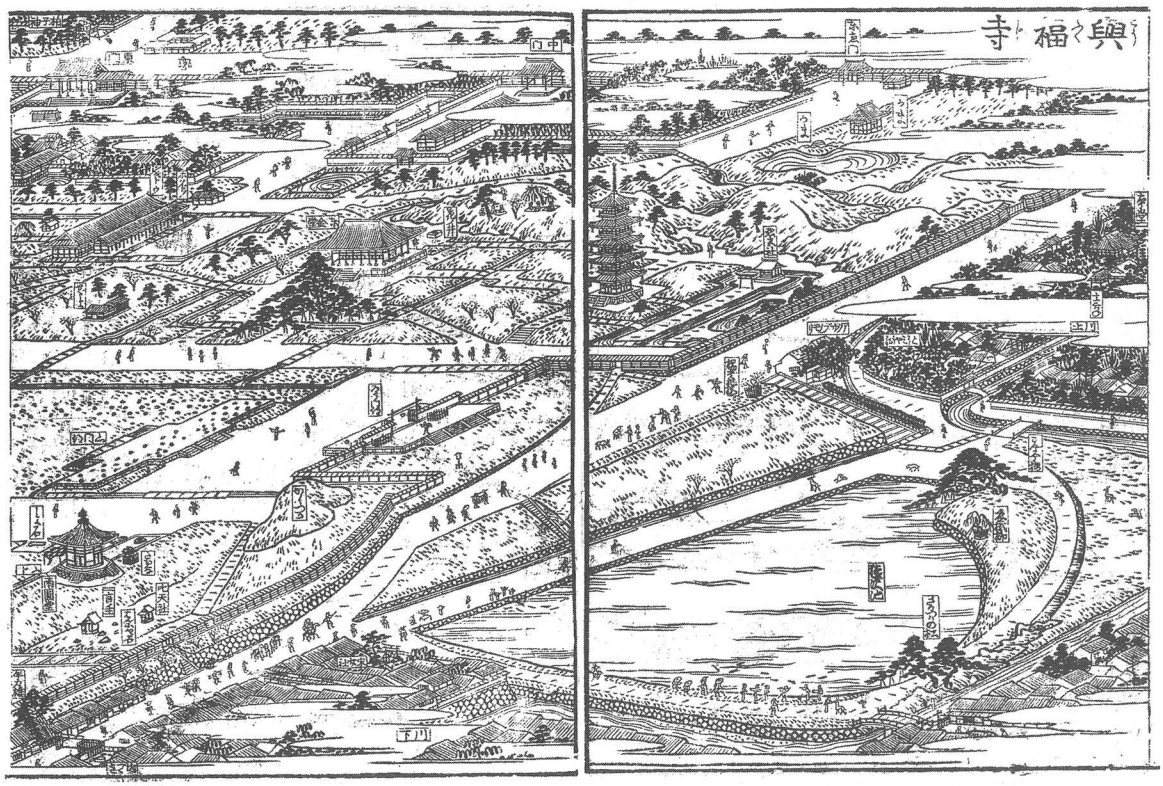
興福寺金堂。講堂。鐘楼。経蔵。廻廊。**中門**。南大門。南円堂。西金堂悉焼失了。

『法隆寺別当次第』顕観僧正項

この再建の供養は、応永６年（1399）３月11日（『大乗院日記目録』同日条）に行われているが、建物はこの間に順次復興されていったようである。こののち、宝永４年（1707）には、中金堂院の西面回廊が倒壊し、他の建物も被害を受けている（『興福寺伽藍春日社境内絵図』宝永５年）。

⑦　享保２年（1717）１月４日

享保二年正月四日亥の剋、南都興福寺講堂より出火し諸堂炎焼す。講堂。金堂。西金堂。南円堂。南大門。**中門**。廻廊。西室。北室。中室。鐘楼。鼓楼。（割注省略）　『塩尻』巻63

火災後の再建は、南円堂が寛政１年（1789）に完成、中金堂が文政２年（1819）に再建されたにとどまる。寛政３年刊行の『大和名所図会』は、南円堂完成後、金堂造営までの姿を伝えるものであろう。

この７度目の火災の後、中門は再建されることなく、その基壇跡は明治期の荒廃をへて、奈良公園の芝地となった。明治18年に撮影された写真によれば、この時点ですでに中門基壇は削平されている。中金堂に向かう参道が敷設され、その両側に松の樹が大きく育っており、調査前の風景に近い姿をみることができる（『奈良公園史』奈良県　1982、頁106 写真47）。